

雪合戦 ルール・審判検定 解答解説

【1】ヘルメットのシールドへ ステッカーを貼るのは禁止である。*

禁止

問題ない

マイヘルチームが増えてくるのにつれて、見解が統一された一つの例ですが、10年ほど前は審判個人の解釈で大会試合中の着用を違反とした例がありました。それも同一大会でコートによって異なった判定になったことも問題でした。また監督のヘルメットが色違いだった為、全員、据え置きヘルメットに変更されたなんてケースも。●マイヘルカラー化もあり最近カラーゼッケンの赤青で判定することが基準となり、ヘルメットの色が揃わないチームに対しても寛容になっています。(昭和新山の例) ※広島大会ではヘルメット色を揃える一文の記載があったのですが、北海道選抜チームが出場したときに、事前に承認を受けてバラバラのヘルメットで参加となっています。大会事務局への事前確認をしておくことかと思えます。

【2】バックラインからセンターラインまでの距離は何メートル？ 記述回答*

回答 **12m**

整列するバックラインから距離です。以前はエンド～バックラインまでの距離が新山6m、日連8mの時代がありました。日連の2017年改定で 6mに統一されています。

【3】フラッグボールにフラッグを巻きつける行為は違反である？*

〇違反

×違反ではない

どちらとも言えない

問題提起の「問い」です。現状、野放しというか、実行されているという意味では、違反では無い、という事かも知れません。ルールに記載が無いから違反なのか、無いから問題ないのか、判断できないという意味では、「どちらとも言えない」言えます。競技なら要ははっきりすべきか、別にそのまま良いのか？フラッグが邪魔という選手の声も多く聞きます。下につけたり、巻いたり、現在、特に規定はないので有利である方法を選択するかと思えます。●審判によって、判断が一人歩きしかねない要素を含んでおり、チームの識別ができないと、その場で指示する審判もいます。これが、審判の解釈でヘルメットのステッカー同様にコートによって異なるとなるのが、問題と捉えます。

●誤審を招く要素としてフラッグに当たった雪球の音で、アウトコールを受けた例もありました。

●どこかに一文を追加するか、●サイズを検討するか、または●大会側で統一されたものを用意するかです。30回大会の国際試合では、運営側が用意した国旗をフラッグに提供したところ国対国の試合で、フラッグを抜かれる事に問題ありと中国に拒否されたこともありました。

【4】昭和新山ルールと日連ルールにおける、監督の名簿記載について異なる点を記述してください。記述回答*

今大会から、昭和新山は 試合ごとに監督を指定できるようになりました。日連は従来通り大会専任の監督で変更できません。

●背景には、近年の参加チームの減少＝登録人数の減少があげられると思います。選手会から提案したパブリックコメントでの成果です。ローカルルールですが、5名での試合成立というのも、同様です。サッポロオープンでは5年前から実施。

【5】雪球を足で蹴って転がすのは問題ない。*

〇

●箸休め的な問題ですが、例えばアウトになった選手が、コート外へ出る際に偶然を装い足で蹴ってそれを行ったら補給行為と同じでしょう。

×

【6】使用する雪球についての絶対条件を記載してください。記述問題*

●雪球製造機で 作られたものに限る。

6.5～7cmと記載された回答もありましたが、実際に雪質により、基準より大きかったり、小さかったりしています。意外と北海道の方が、ジェットヒーターを使用しているため、新雪や含まれる水分によりサイズの変化が大きいようです。

【7】無効球の定義について 3つ挙げてください。記述問題*

- ① 2/3以下の大きさのもの
- ② アウト競技者が持っている雪球 ※日連のみ、昭和新山にこの記載はありません。
- ③ コートの外にある雪球、コートの外からは入ってきた雪球 ※日連はこの記載が、2つに分かれ4項目になってます。

※ここでは、解説しませんが、②のアウト競技者の持っている雪球 というのが様々な誤解と解釈を生んでいると判断しています。

【8】無効球を使用することを防止するために主審がすべきことを挙げてください。記述問題*

●天候、雪球の状況を見て 試合開始前や、セット間に、注意喚起をはっきり伝えること

※試合前の雪球チェックの時に指摘するという回答も正解としますが、選手全体に伝達する方法として試合前としました。

●冬の雪合戦は、自然の雪を相手にするがゆえに、サイズもそうですが基準などいろいろ厄介な要素を含んでいます。競技として考えると、より複雑に対応していく必要性も感じますが、これも部門によってはさほど、問題すべきことでは無いです。

●ひとつ、はっきり認識して欲しい点は、無効雪球 と 不正雪球 の違いです。

【9】無効雪球でアウトになるケースを2つ挙げてください。記述問題*

●無効雪球を投げた場合(問7のケースを確認)

●アウト選手から直接雪球を受け取った場合

※直接とは、隣にいる選手など手渡して直接渡された選手が対象

【10】無効球に関する記載で、昭和新山と日連ルールの異なる点を挙げてください。記述問題*

- ① 日連ルールには「アウトになった選手が持っている雪球」がある。 ※問7解答を参照、最終ページに解説します。
- ② 新山ルールにはアウト競技者が 意図的に補給をする行為をすると罰則。

項目①は最初から共通ルールでありましたが昭和新山では現在②となり「アウトになった選手が投げた雪球に当たってもアウトにならない」という記載に変わりました。アウトにならないという意味での「無効」とは意味が異なることを意識して欲しいです。

「アウトになった選手が持っている雪球」の使用については、直接渡した場合はアウト。日連は、アウト競技者は「その場に雪球を置く」とあります。

⋮

【11】不正雪球の定義を3つ挙げてください。記述問題*

- ① 競技中に壊れた雪球に、さらに雪を加えてつくりなおした雪球
- ② 競技中に、壊れた雪球を他の壊れた雪球 と合わせてつくりなおした雪球
- ③ 競技中に新たに作られた雪球

【12】試合中、雪球を握りしめる行為は不正球ではない。*

不正ではない

不正雪球である

●不正雪球ではありません。

両方の組織にも確認済ですが、不正雪球ではありません。この解釈が審判により異なり10年も前から、アウトコールを受けたと、選手からの報告があります。無効球ではない雪球を締め直しても不正球の項目に該当しません。

●ただし、選手には紛らわしい行為はしないように、審判講習などを通じて念を押すことも必要かと思えます。この1つのアウト誤認で試合の勝敗が決まる雪合戦にはしたくありません。

...

【13】アウトになる場合の定義で、昭和新山と日連ルールで異なる場合は何でしょう。*

ラインアウト

●正解 フライング

フライング

●昭和新山は フライング選手はアウト。 ●日連はアウトとはならず、2回目でチームに警告イエロー

ワンバウンド

ブログでもいろいろ書かせていただきました。新山は静止せよとは記載していませんが、選手には動くなど説明しています。日連は「ラインを踏んでいれば」動いても良いとわざわざ、記載されています。フライングを防ぐのであれば、どちらも誘発を回避させる記載にするべきと考えます。

【14】小論文 問【13】の違いについて、個人的な意見を述べてください。記述問題*

ブログでもいろいろ書かせていただきました。

●昭和新山は、静止せよとは記載していません。 ※審判は選手には動くなど説明しています。

●日連は「ラインを踏んでいれば」動いても良いとわざわざ、記載されています。

フライングを防ぐのであれば、**どちらも誘発を回避させる内容**にするべきと考えます。

静止せよと言えない理由は、やはりコートや雪状況で足場の悪い場合に、バックラインを踏んだ段階で足元が滑って動く場合もあり、またそれをフライングをする審判の解釈もあって、明確なガイドラインが必要かと思えます。

動いても良いとすると、フェイクで投げるふりをするなど、選手同士の誘発行為も可能になります。

どちらにせよ、フライングはさせない、しないが基本であり、審判動作も併せて必要になります。 問22に関連します。

【15】試合開始のスタート方法について昭和新山と日連ルールで異なる点を挙げてください。記述問題*

●スタート時のコール「よーい」の有無 昭和新山独自のもの

...

【16】問題【15】の答え：昭和新山が導入した方法についてその理由を挙げてください。記述問題*

●フライングを誘発するのではなくフライングが起きないように、明確な動作にするため。以下解説です。問17、18と関連

もともと同じルールであり、特に審判の動作やフライング判定基準である、「どこから どこまで」に、不具合があったためです。それはフライングの判定開始が、「主審が両手を広げてから 開始の合図まで」だったことです。この通りの判定をおこなえば、副審は主審が両手を広げた場面を、目視で確認する必要があります。

そのため、①主審が両手上げるのをみる ②選手を見る が必要になり、細かなことを言えば主審は、副審が自身が両手を広げたのを確認してから笛を吹く、となります。副審の矛盾点は、主審に対して正面以外は、後ろ向きで極端な場合、振り返るような動作になってしまいます。それを真面目に、試合前に指導している場面をみて矛盾を感じたものです。

もうひとつ主審によっては、笛を吹くタイミングがやたらと長くなる審判がいることも一因です。

上位チームの対戦になると、開始時に選手がセンターへ走る場面が多くなり、その早さを競う要素が大きくなってきた事を重視し、早さを競う競技同様に、『ヨーイ、ドン方式』を採用した訳です。

フライングの判定開始も「主審のヨーイから 開始の合図まで」となりました。これも道央で先行し、提案したものです。

日連ルール・競技規則では、今回、審判動作の中で、この点が改正され、「審判は選手を注視する」となりましたが、肝心の「主審が両手を広げてから 開始の合図まで」の記載はそのまま残っています。この点が矛盾していると考えます。

●補足。主審によってホイッスルを吹くまでの感覚がやたら長い場合があり、フライングの誘発につながる点が指摘されています。この点は、審判動作により以下のように整理していますが、まだ徹底されていないというのが現状です。

①『〇セット開始します。』 ②『ヨーーイ！』とコール

③ 笛をくわえ、両手を広げる ④『ピッ！』と短く強く吹くと同時に、両手を前に持ってきて合わせる。

「ヨーイ」のあと 1、笛をくわえる 2、両手広げる 3、「ピッ！」と 間隔はともかく イチ、ニツ、サンの タイミングです。

①『〇セット開始します！』は スタート競技の「位置について」と同様 の意味があります。

ヨーイから、やたら笛を吹くまでが早い審判もいます。これはフライングするスキを与えないという考えですが、この点は標準的な統一で徹底していくべき点かと考えます。

【17】 フライングを判定する「開始となる」のは、どこから、ホイッスルが鳴るまでなのか、昭和 ^{*} 新山の場合、日連の場合、それぞれ挙げてください。記述問題

●問16で 解説記載したとおりです。

日連 「主審が両手を広げてから 開始の合図まで」
昭和 ^{*}新山 「主審のヨーイから 開始の合図まで」

...

【18】 今回の日連ルール改正で、^{*}副審は、主審の開始の合図と競技者の動きに注意し、フライング ^{*}に備えると記載されました。問【17】の答えと矛盾すると思う点を挙げてください。^{*}問【16】とも関連します。記述問題

●問16で 解説記載したとおりです。

日連 「主審が両手を広げてから 開始の合図まで」ですが
審判は選手を注視しており、両手を広げたタイミング＝判定開始が確認できません。

【19】 チームがシャトーに雪球をセットした以降から、試合開始の宣告前までに主審が行うべき ^{*}動作について、思いつくことをすべて挙げてください。^{*}宣告前とは。「第一セットを開始します」の前まで。記述問題

①全審判の動きを確認しつつ、両チームの動きに差が出ないように注意喚起を行う。

例)・整列が遅れているチームへの整列の促し「赤チーム急ぎましょう」、
・「雪球2球以内をもってバックラインへ 整列してください」などの声掛け。
理想は両チームが、同じタイミングで整列してもらうこと

特に、センター副審と初対面で試合に臨む場合や経験を考慮し、見るべきポイントを確認。(6人、8人制により異なります)

②両チームがバックラインに整列した時点で、副審全員へ、1人ごとに手を挙げて確認

③記録係に確認 ※アウト選手のチェックなど 本来は試合前に

④時計係にストップウォッチスタンバイの確認 その他は試合前に事前確認。

⑤コート主任への確認、隣のコートがある場合は、開始のタイミングが重ならないように注意。

ほか、監督の立ち位置確認などの回答もいただきました。気が付く点はなんでもOKです。

...

【20】 この写真から真ん中のセンター審判の向かって左右どちらが1シエル担当審判か。2択



●本来はもっと間隔をつめても
良いくらいです。

質問 ^{*}

右の審判

左の審判

【21】 試合開始フライング再スタートと、試合中断の再スタートで、異なる点を挙げてください。記述問題 *

- 開始フライングスタート / 持てる球「2球」 投げてしまった場合は持ち直しできる
- 試合中断スタート / 自コートにある雪球 「1球」だけ

【22】 フライングの誘因が、主審にあるとしたらどんなケースが考えられるか。記述問題 *

- 隣に コートがある場合に スタートをずらすなどの配慮をしなかった場合
- むやみに ホイッスルを吹くタイミングを長くした場合

【23】 スタート時に1シェル審判とセンター審判が背中合わせで距離を詰める理由を挙げてください。記述問題 *

- 逆方向を向いている左のセンター審判に対して、見えない側の選手へのアウトコートが届きやすくするため。
- センター寄りに位置することで、視界を広く確保できる。

【24】 審判がアウトコールした選手がなかなかコート外へ出ない場合の最終手段を挙げてください。記述問題 *

- 最終手段として 直接選手を引っ張り出す。

※その時に、本来見るべき選手から、目を離さないように注意することが重要です。
理想は、声だけで、アウトコールを伝えるくらい、大きな声で制圧できること。

【25】 審判がアウトコールした選手にアウトを宣告する場合、重要な方法を思いつくだけ挙げてください。記述問題 *

- 最大限、大きな声でアウトコールする。ゼッケンの色、番号も宣告
 - 一度で出ない場合は、何度も連呼する。
 - 手を指し示し宣告する、当たった部位もジェスチャーで示す。
 - 被弾以外のアウトは その理由も宣告～ラインアウト、無効球、不正雪球など
- ※8人制対面審判の場合は、対面審判と同様に複数審判でもコールする。

【26】アウトになった選手、控え選手が試合中に指示を出す行為があった場合、どの反則行為に該当するでしょう。三択 *

- チームに警告
- 該当選手にレッド退場、チームに警告
- 選手に警告

●『競技妨害で選手にレッドカード、チームにもイエローカード』となります。両組織のルールでも共通で『コート外の選手が試合中、指示を出した場合・・・』と明記されてます。
しかしながら、該当選手に一発で退場という判定は、心情的にも重すぎる為か、最初は注意という場合が多いのが現状です。本来、「競技」とするのであれば矛盾した対応ですが、ここが意見も分かれるところですよ。

【27】1シェル担当審判の動きについての問題。 スタート時、1シェルの手前段階で、アウトコールを出した選手が、そのままセンターへ走った場合取るべき動作を挙げてください。記述問題 *

●スタート時に関して言えば、1シェル以降、センターまでのエリアはセンター審判に任せます。アウトコールがスタートから1シェル間にあった場合は、動作として左手で選手を追いながらアウトコールを連呼し、センター審判に伝えつつ、視線は1シェルへ入って来る次の選手を注視するのが1シェル審判の取るべき一連の動作と考えます。

【28】6人制審判、8人制審判で、1シェルの審判のポジションで大きく異なる点を挙げてください。記述問題 *

●スタート時以降は、1シェル審判で大きく異なるのは、6人制では後ろ向き、8人制では、センター方向の前向きとなります。8人制ではセンターに選手が入る場合、1シェルとセンターシェルをつないだライン上に配置して、センター審判と対面する形でセンターも判定します。6人制では、1シェルと2シェル選手の内側の両方を判定します。

【29】問28に関連する問題。8人制での1シェル審判のポジションが、そうなった理由を二つ挙げてください。記述問題 *

- センターシェルターでワンバウンドした雪球が後ろ向きでは判定できないケースが多く出てきた。
- センター審判と対面する形で判定するので センター2トップの選手間の死角も1シェル側から判定できる。

【30】4人目がセンターラインを超える規定で、日連と昭和新山の異なる点を挙げてください。記述問題 *

- 日連は、一方どちらかの足がセンターラインを踏み越した場合を規定している。
- 昭和新山は、ラインオーバーアウトの判定基準を、センターにも取り入れている点。手や腰など体の他の部位も対象としている点。考え方はラインに関して、同じ基準にして、わかりやすくすることが目的。

【31】 コートの外に選手が出ていない状況は？



●上の図はいわゆる、セーフの状況でもあるが、アウトの状況で考えた時に①であったり、他に四つん這いになって手をついた場合、ラインをまたいでいる状態でも、アウト = 外に出た ことになる。そうすると、見た目には、選手の体がコートに残っていることになり、センターラインを巡る3人目以降の判定で、4人目か、最初の1人がコート外へ出たかの判断が難しくしている。実際に フラッグ奪取を最後の手段として突っ込む練習をしているチームもあり、判定がより難しくなっていると見える。日連審判動作では、4人目の判定を確認すると記載されている点が救い。実際にはそうそう直面する機会は少ないが競技性が高まっていく中では、いずれ際どい判定となってくるので、まだ③のように コート内に体、体の一部が残っていない状態、完全に出了場合、とした方が明確になるのではと考えます。

【32】 中断判定の審判の権限について 日連と昭和新山の異なる点を挙げてください。 記述問 *

【日本連盟】

ルール表記では、中断を判断するのは主審の合図によるとあります。副審は主審に中断を通告して、同時に主審が競技を中断する、とありますが、審判動作の表記では、「副審は中断を主審に通告し」と記載されてはいますが、動作は、両腕を上で交差し断続的に笛を吹くと、具体的な中断動作の記載になっています。

●選手は雪球をその場に置く ●「ストップウォッチは主審中断の合図で止まる」とあります。

【世界連合】

中断は主審に限らず副審も可。選手、監督もケガなどがあつたとき中断を要請できる。

●選手は雪球を持ったまま

日連は主審への伝達になりますが、結局どちらも、副審も中断の権限があるという事です。ただ主審が見ている側でなければ、タイムラグが生じることになり、センター以外の副審が試合中断を決断する場面は経験も必要かと思われます。

【34】 アウトに関する判定方法で、日連には無い、昭和新山ルールを挙げてください。 記述問題 *

- アウト規定としては『フライング』
- 審判動作として『セーフコール』が存在。

ちょっと問題の意味が二通りありました。フライングに関してはわかると思います。

「セーフコール」のは 選手からの提言がきっかけでした。

『アウトコールをオーバーコール出来ない』という矛盾も感じますが、中断へつながる事から ルールも動作もまだまだ完全なものとは思えません。

ただ、セーフコールがあることで 少なくとも黙ってアウトコール以外のアクションが無い審判よりは、見ている雪合戦が、わかりやすいのは確かです。対面審判という、複数審判での体制とともに整備していければ、少しでも見落としや誤審のリスクを減らすことに、つながる事としては評価できるかと思ひます。

【35】小論文 現状雪合戦がビデオ判定できない思いつく理由を挙げてください。記述問題*

- 単に当たったアウトがどうか？についての判定であれば、お金があれば可能かも知れませんが、雪合戦は、最大14名の選手が14球の雪球を投げ合い、判定すべき場面も一連の流れで同時に動く競技なので現状では不可能ではないか？という認識です。
- 試合を止めて判定し、再開となると、現在の再スタートルールの見直しも必要になります。前後の選手、他の選手の動きも確認する必要が出てくる事が想像できます。
- 判定の中断により雪球の個数を戻すことは不可能であり、ルールの整備必要となると思われませんが、その都度、試合を止めとなると現在の雪合戦と異なる競技になるのではと考えます。それを良しとするのか？
- マイナー競技である雪合戦では、お金が無いという現実的な側面もあります。昭和新山大会規模であれば、8コート分です。

現状では、としましたが、ビデオ判定以前にルール・審判動作の統一や確立、優秀な審判人材の育成が整ってからのことかと考えます。

【36】フラッグ奪取を試みた選手が、アウトコールを受けながらフラッグ抜きをコート外へフラッグポールを投げてしまった場合の審判の動作について挙げてください。記述問題

- フラッグはそのままにし、このセットのフラッグ奪取は無くなります・アウト選手、チーム監督他の審判がフラッグポールを戻したりしないように注意します。

【37】フラッグ奪取を試みた選手がアウトコールを受けフラッグが倒れたままの場合、次の選手が一度、フラッグを立て直して抜けば、フラッグ奪取成功となるが、立て直す前にアウトになった場合、現行のルール解釈ではフラッグポールはどうあるべきか。

ポールを立てることは出来る。

ポールは倒れたままに戻す。

●「フラッグを抜いてしまったアウト選手は、フラッグを立ててから、コート外に出ることが出来る」とあります。



左ページ①の説明にあるように、アウトコールを受けて勢いで抜いてしまった場合は「抜いた選手」のみ、戻すことが出来ます。抜いて倒れたままにした場合は、次の選手が犠牲になってでも、フラッグポールを立て直さなければ、フラッグ奪取を行うことは出来ません。成功、失敗に関係なく抜いたら、戻す事が基本と覚えてください。



アウト宣告を受けてそのままポールが抜かれて倒れた状態の時は審判もポールを戻してはいけません。次の選手が「一度、ポールを戻す前にアウトになった場合」はポールは抜かれたまま、「ポールを戻したが再び抜く前にアウトになった場合」は戻すまでは出来たという事ですからポールは立った状態です。「戻した直後にアウトで再び抜いてしまった場合」は戻すことが出来ると認識してください。最初に抜いた選手がアウトでもセーフでも元に戻す事を試合の前に注意する事も必要です。



確認の上、別冊「雪合戦のススメ」に左記のように掲載させていただいた内容です。

実際にこのようなケースに遭遇するのは2~3人の複数選手が、同時にフラッグに走り、密集の中で起こりうるのですが、かなり稀なことです。

倒れたままのフラッグを次の選手が持った状態でアウトコールを受け、3人目選手がそのフラッグをアウト選手から、直接受け取って指し直して抜いた場合です。

つまり、2番目の選手は、フラッグを抜いていない、という事になり、もとの倒れた状態に戻さなければ、となります。

実際にはめったに遭遇することの無い場面ですがあくまで、ルール記載に則った形にするとこうなります。万一の中断の時に覚えていてください。

【38】VT戦で5人目で決着がつかず、6、7人目でも決着がつかず、2周目に入る場合の選手の *
順番は、

- 最初に投げた順番を以降、決着するまで繰り返す。
- 2周り以降、順番をかえることができる。

●日連では、以前、2まわり目から投げる順番を変えることが出来ましたが、2019年12月のルール競技規則の変更により、変更できない事に改定となっています。

ただ細かな点ですが、リザーブの選手と監督はコート外に出るように配置図が記載されています。昭和新山は特に触れていないのでコート内に全員いる場合があります。

【39】VT戦の時の投球ラインの規定について、日連と昭和新山の異なる点を挙げてください。記 *
述問題

- 昭和新山ではラインオーバーの規定と同じで、ライン、またはポールに触れても、踏んでも踏み越さなければ問題はなりません。
- 日連は ライン、ポールに触れたら無効となります。
※誤解を招いたかも知れませんが、ポールの設置方法によって、ロープだったりフラッグポールだったりします。

【40】VT戦で、主審のホイッスル前に投げた場合は、2択問題 ~最終問題 *

- 無効となる。
 - 投げ直すことが出来る
- 最終問題は、ルール記載のまま、審判の合図の後に限られます。
あまりに早く投げて成功したことに対し、それは無効とやり直して成功としてしまったケースがありました。

●【補足】問題7~10の無効球について。

●もともと、ルールの中に、『アウトになった選手が持っている雪球』は無効雪球という記載がありました。

そこで、『アウトになった選手が残した球を使った選手はアウト』という認識が歩き出しますが、どの雪球か試合中にそれを追うのには無理がある、だったら本来のアウトを見逃すと議論がおきます。

日連には『アウトになった選手は、直ぐに雪球をその場に置いてコート外へ』という細則があり、意味を確認したところ、その場に置いた雪球については、無効雪球ではなくなるとの事です。

ただ、現在も『アウトになった選手が持っていた雪球』を「無効球」と定義している中で この点の解釈が誤解され、組織間でも統一されていないケースがあります。審判の認識も同様ですが、共有されるべき基本事項かと思えます。

その議論から昭和新山でも『アウトになった選手が持っている雪球』は、無効雪球という定義はなくなり『雪球をそのまま持ってコート外へ出る』に改定されました。紛らわしい雪球を排除する考えだと思えますが、それがやっと定着したとおもったら、『その場に置くルール』に変更したのです。持ち出さず、置いていかず、『補給した場合はどうなる?』とそれが問題だという事になったのでしょう。一年後に、今の『アウト選手が持っている雪球を補給したらイエロー』となりました。(以上、新山です)

両組織とも『アウト競技者から直接、雪球を受け取った選手はアウト』とありますがこれは理解できると思います。

昭和新山の記載で『アウトになった選手の投げた雪球に当たってもアウトでは無い』という意味、での「無効」というのも理解できるかと思えますが、アウトになった選手が投げた雪球を「無効雪球」と言ってしまうと話が、ややこしくなるわけです。

2019年の昭和新山では 『アウト選手が持っている雪球を補給したらイエロー』を出せとコートにも指示が出ますが、チームへはその指示も説明した上で、その場に置く事を推奨しました。実際にこの警告が出た事例は聞いていません。

★今回は認識の確認とその共有が目的ですので 記載内容に間違いや疑問だと思われる点があれば是非ご指摘ください。